

近世前期の仏典注釈

—— 光隆寺知空の講義録と出版 ——

木村 迪子

要 旨

西本願寺二代目能化・光隆寺知空は承応の閭牆を契機として西吟教学からの決別を果たし蓮如義に移行したと言われる。近年、これに反論して知空の西吟教学継承を説く動きが顕著である。まず、本稿では主にテキストから検証されてきた知空による西吟教学の継承を、これまで検討されてこなかった明暦三年に行われた知空の講義録二書に注目し、その証左とする。第一に、知空が講義に選んだ『浄土或問』ならびに『仏遺教經論疏節要』が明代の禅僧・雲棲株宏の注釈を附した和刻本であったことを指摘し、明暦三年時点で知空による西吟教学の踏襲があったことを明らかにする。次に寛文元年刊行の『和讃首書』が当時禅籍にのみ用いられていた頭書形式を踏襲していたことを指摘する。次に、明暦三年の知空の講義録『浄土或問鉤隠』が天和三年刊頭書本『浄土或問』に利用され、またその増補再版に浄土宗西山派の学僧・諦全が補考を附した事実から、元禄期における仏典注釈の交雑化を指摘する。十七世紀における頭書本仏書の流行は重板類板の規制強化を受けて急速に衰えたが、寛文末頃から不遇を託っていた知空は元禄八年の学林再興と共に能化に返り咲き、以後、今度は大坂の書林・毛利田庄太郎らと組んでその仏典注釈板行を行った。こうした積極性、柔軟性は知空に限定されず、十七世紀仏教と宗学への積極的な評価に繋がるものである。

はじめに

近世期、仏典注釈は偏に訓詁的、説明的、そして内向的との消極的評価のもとに甘んじていた。例えば藤井学は以下のように述べている。

幕府は、教説の異儀・新儀の解釈を厳しく禁じた。したがって教典・聖教の訓詁的研究は進んだが、教説の創造的な発展はこの厳しい制限下に行われ、とくにそれが民衆の「世直し」的な反権力の闘争に結びつくような教義解釈の発展は近世仏教史上から消え去った。⁽¹⁾

一方で石田慶和は真宗本派のみに注視して「訓詁学・説明中心の解釈学」が三業惑乱（文化三年裁決）以後に生じて「その態度が今日に至る真宗教学の性格を決定してしまった」と指摘する。⁽²⁾

現代における近世宗学の〈訓詁的〉〈説明的〉との評価が十八世紀後半に生じたとの指摘は注目し値する。石田はこれを真宗本派に限定しているが、幕末までには各宗派ともに同様の状況であった可能性が高いからである。とすれば、近世仏教はこれをひとまとめに論じるべきではない。少なくとも、十七世紀と十八世紀とでこれを分けて検討する必要がある。そこで本稿では今試みに西本願寺二代目能化・光隆寺知空（寛永一一〜享保三）に注目して、その仏典注釈活動を明らかにしたい。

一、承応の閲牆と明暦三年の講義二種について

知空は寛永十一（一六三四）年、栗田口真覺寺・明性の第四男として生を受けた。明性の子息はいずれも学識に優れ、学僧として名声を馳せている。知空は長兄・円海より早くから宗学を学び、また泉涌寺・光明寺に遊学し、西本願寺の学寮に入って豊前小倉永照寺の西吟（慶長一〇〇〔寛文三〕に師事した）。

知空が入った西本願寺学寮は寛永十六年、西本願寺第十三代門主・良如（慶長一七〇〔寛文二〕により創設された⁽³⁾。寛永十七年、准玄（天正一七〇〔慶安二〕が初代能化に就任するが、正保四（一六四七）年、自坊に帰る。同年、その後を受けて西吟が第一代能化に就任し、慶安三年、学則が制定された。知空が学寮に入ったのもこの頃である。

慶安五年、知空は西本願寺御堂衆⁽⁵⁾に加わった。一方で、学寮においても頭角を現す。この年に西吟の『安樂集』講義を聴講して『安樂集鑰聞』を著し、これが西吟に認められて学寮運営を担う中心人物の一となったのである⁽⁶⁾。

承応二（一六五三）年一月、肥後国延寿寺月感が学寮における西吟の講義を異安心であるとして訴えを起こした。これを契機として所謂〈承応の閲牆〉が起り、明暦元（一六五五）年、幕府により西本願寺学寮の破却が言い渡された。学寮創建からわずか十五年ほど後の出来事であった。西本願寺は飯饗を設けて講義を再開したが、能化である西吟は承応の閲牆後、講義を行わず、結句、明暦二年八月二十七日に『御私記』の講義を行ったのを最後に、同年十月、豊前に帰ってしまう。以来寛文三年に没するまで西吟が上京することはなかった⁽⁷⁾。

失脚した西吟に替わって西本願寺宗学の中心的人物へと躍進したのが当時まだ二十三歳だった知空と言われる。菌田香融は承応の閲牆後、「初期宗学の基調が蓮如義におかれていたこと、ならびにその推進者の第一に知空が考えら

れること⁽⁸⁾」を挙げて、知空が西吟教学を継承せず、蓮如義に注力したとする。これについて、伊藤願慈は蘭田の説を踏襲し、以後の知空教学が承応の閨牆を契機として西吟のそれと決別したとするのが現在の通説であると指摘した。⁽⁹⁾

西吟教学との別離か継承かは知空教学研究において現在でも重要な論点となっている。宗学研究において、これは本文から解釈されてきた。例えば三浦真証は知空の西吟教学継承について、

西吟の傾向と同様のことは知空にも指摘できる。……西吟・知空など初期真宗学匠たちが意識したのは、真宗独自の法義の顕彰であつたことは当然として、それと同時に、当時出版されていた中国仏教典籍を参考にしながら、仏教としての念仏思想の中に真宗を位置づけることにあつたと考えられる。⁽¹⁰⁾

とこれを肯定している。そこで本稿ではまず従来研究の俎上に載せられてこなかった講義録二書を通してこれを検討したい。

『本願寺派学史』には明暦二年以後、知空の安居の講義があつたことが次のとおり記されている。

同 二年 安居 講事未詳或曰知空講安樂集

同 三年 安居 講事未詳或曰知空講往生論註⁽¹¹⁾

明暦三年の講義内容については『往生論註』か、と述べるに留まる。しかし、私に調査したところ、明暦三年の講義を想起させる講義録二書が確認できた。一は『浄土或問鉤隱』であり、もう一は『遺教経論補註節要私考』である。次に両書についてその内容を簡単に示そう。

『浄土或問鉤隱』は管見の限り大谷大学図書館所蔵本（谷大本）が唯一である。その序には次のように記されている。

浄土或問鉤隱 并序

丁酉西ノ春向三三子^ニ、欲^レ講^ニ於^ニ則禪師ノ所^ニ著或問一卷^ヲ。文^ニ深^{シテ}而高^シ矣。義^ニ幽^{ニシテ}而難^シ矣。賢愚相去^リ

利鈍成差^{シテ}。是^レ以^テ解^{スル}ヲバ義^ニ因^ル人^ニ。強^テ不^レ俟^レ註^ヲ。而^レ復^タ例証ノ事^ニ義・字訓ノ魚魯^ハ不^レナリ有^レ不^レモ^タ。紀^ノ是^レ予^ガ所以^ニ葛^ニ藤^ニ鉤^ニ隱^ニ者^ノ、在^リ于茲^ニ焉。冀^ク鉤^ニ於^ニ半^ニ句^ニ一^ニ辞^ノ之^ニ隱^レルヲ、則^ニテ^ハ于^ニ禪^ニ仏^ニ不^レ二^ノ之^ニ者、於^レ予^ニ幸^{ナラシ}矣。若^シ復^タ頓^ニ開^ニ一^ニ隻^ニ眼^ヲ、而直^ニ到^ニ無^ニ疑^ノ處^ニ遥^ニ肖^シ于^ニ無^ニ何^ノ有^ノ之^ニ郷^ニ優^ニ游^セ于^ニ秘^ニ蜜^ニ嚴^ニ之^ニ国^ニ者不^ニ予^ガ語^ノミ^ニ爾^ニ。天如^ノ之言^モ亦^タ寐^ノ語^{タル}ノミ而已^ニ。阿^ハ呵^ハ々。明曆第三^ニ仏滅^ニ日習^ニ善堂^ニ大^ニ可^ニ謹^ニ識^ニ。⁽¹²⁾

本講義に用いられた『浄土或問』の作者は元代の天如惟則（一二八六～一三五四）である。承応の閨牆が起こった承応二年に秋田屋平左衛門から和刻本が板行された。本書は明代の禅僧・雲棲株宏（一五三五～一六一五）がこれに注釈したことでよく知られた。実際、寛文十年刊書籍目録には本書をして天如惟則ではなく、

一冊、浄土或問 雲棲株宏編⁽¹³⁾

と、株宏を挙げる。『浄土或問鉤隱』には本文中に「一号」「二号」と丁数を記しており、知空が講義に際して承応二年刊和刻本を用いたことは確実であろう。

次に『遺教經論疏補註節要私考』であるが、こちらは正大学附属図書館（正大本）と龍谷大学大宮図書館写字台文庫（龍大本）とに写本が確認できるが、両書間には複数の異同があった。中でも顕著な事例として、龍大本には卷末に次のように記す。

明暦丁酉夏講茲註時草私考一卷而在積裡有年矣。今春、忝大衆請再口講之重閱私考脱闕籍甚以故補続而与初學者然有間未考詳者則欠字剩紙俟。宏智之補綴而已。寛文戊申仏涅槃日維下沙弥某謹識。⁽¹⁴⁾

一方、正大本はこの箇所、

明暦丁酉夏講茲註時草私考一卷而在積裡有年矣。今春、忝大衆請再口講之重閱私考脱闕籍甚以故補続而与初學者然有間未考詳者則欠字剩紙俟宏智之補綴而已。寛文戊申仏涅槃日大谷門人維下光隆沙弥知空謹識。⁽¹⁵⁾

と記して、傍点部分が龍大本にないことが明らかである。内容についても正大本にある文章が龍大本には欠けている場合があり、また筆蹟や紙質から見ても、正大本が龍大本に先行するのは間違いないのではないか。龍大本は何らかの事情があつて内容に修正を加えたと思われるが、その理由は判然としない。

講義に用いられた『仏遺教経論疏節要』もまた承応三年に長谷川市郎兵衛から和刻本が板行されたことが分かっている。国立国会図書館所蔵本にその著者として巻頭に次のように記す。

姚秦三蔵法師鳩摩羅什訳

晋水沙門浄源節要

雲棲沙門株宏補註⁽¹⁶⁾

本書もまたその書名には北宋代の華嚴僧・晋水浄源（一〇一一―一〇八八）による『仏遺教経論疏節要』を挙げるが、内実はこれに雲棲株宏が注記した『仏遺教経論疏節要補註』だった。

右の二講義とその記録は単純に知空が西吟の後を受け仮譽を盛り立てるために行つたものであると結論づけがたい。なぜなら講義に用いたテキストは両書ともに雲棲株宏が関与した明代浄土教の流れを汲む文献だからである。

承応の閏牆は月感による西吟教学の批判を端緒としたが、彼は「謹奉訴状」において、次のように述べている。

私今度罷り登り。学寮講談ノ様子承り候へハ。自性一心ノ理談ノミニテ。御家安心ノ談ハ。曾テ以テ御座ナキト申スニ付テ。能化所作ノ章疏并ニ聞書等ヲトリヨセ。披見仕り候へハ。十二九ハ。禅家ハ一心自性ノ理觀。残テ一分二分ハ。偏空ノ邪見⁽¹⁷⁾……

学寮の講義において「自性一心ノ理談」のみが語られていた、しかも、能化西吟の講義録を閲するにその内容は「禅家」の思想が大半であつたとの謂である。西吟教学の否定はすなわちその思想に禅的性格が強くあらわれていたこと

に依拠する。問題はその禪的思想に株宏教学をはじめとする明代浄土教も含まれていたことである。三浦は以下のとおり指摘する。

西吟の実現しようとした真宗学とは、浄土真宗の法義を仏教全体の中に位置づけようとするものだった。……西吟の思想とは、『蓮宗宝鑑』や『阿弥陀経疏鈔』など、中国の禪浄一致を説く浄土教典籍に共通して説かれるものを取り込んだものと言えよう。⁽¹⁸⁾

承応の閼牆が西吟の禪的思想を発端とし、それに株宏教学の利用も含まれているとすれば、事件後間もない明暦三年の講義に知空がこれを活用したのは明らかに西吟教学の継承と見える。実際、『浄土或問鉤隠』序文には、
冀くば、半句一辞の隠れたるを鉤て、禪、仏、不、二の地に則ては予において幸ならん。

と記す。傍点部、「禪仏不二」とは他の用例が見いだせないが恐らくは〈禪浄不二〉と同様の意味であろう。本講義において知空がその基底に〈禪浄不二〉、また〈禪浄一致〉を据えていたとするならば、これは明らかに西吟教学の踏襲であり、禪的性格の固持と言えよう。

以上から、少なくとも明暦三年時点において菌田が指摘したような知空の西吟教学からの別離と蓮如義への傾倒はこれに肯んじ得ないと結論づけるのである。

二、『和讃首書』の板行と頭書本の興り

知空における西吟教学、また禪的性格からの脱却は承応の閼牆を契機とせず、少なくとも明暦三年時点ではこれを確定し得ないことを示した。次に寛文元年に出版された初期の知空著述出版から知空とその禪的性格の発露を見てい

きたい。

寛文元年、西村九郎右衛門から『和讃首書』と『往生論註翼解』の二書が板行された。二書を以て知空著述の出版の嚆矢と比定する。

『和讃首書』はその名のとおり、親鸞が著した『三帖和讃』に頭註を付した書である。既に『三帖和讃』については大谷派の慶秀（弘治四〇慶長一四）による『和讃私記』（正保四刊、大和田九左衛門）が成っていたが、本願寺派としては本書が最初期の注釈であろう。本書について、家蔵本の書誌を簡易的に挙げ、本文と刊記部分の画像を載せると以下のとおりである。



大本、三卷三冊。

表装、原題簽一部存、「和讃首書 高僧（正像）」。

尾題、「浄土和讃首書」、「正像末和讃首書」

板心題、「首書和讃 上（中、下）」

刊記、下巻裏見返しに「寛文改元応鐘下澣／五条橋

通丁子屋／西村九郎右衛門板行」。

さて、本書はただ単に本願寺派初めての『三帖和讃』注釈であり、知空の最初期の出版物というわけではなかった。これについて説く前に、十七世紀における頭書本の流行について示す。

高山節也は頭書本をして漢籍にこの形態が存在せ

寛文改元 應鐘下澣
 五條橋通丁子屋
 西村九郎右衛門板行

ず、和刻本に特徴的であることを指摘し、その発端を『老子麴斎口義』（正保四刊、林甚右衛門）に比定した。⁽¹⁹⁾

これを踏まえ、私に仏書における最初期の頭書本を調査した結果、『碧巖鈔』（一〇冊、慶安三刊、堤六左衛門）に行き当たった。また、寛文十年刊書籍目録を紐解いてこれに「頭書」ならびに「首書」と記された仏書を挙げると以下のとおりである。

天台宗については、『孟蘭盆經疏新記頭書』（四冊）、『因果經頭書』（一冊）、『三界義頭書』（二冊）、律宗は『六物図首書』（二冊）、真言宗は『六卷名目首書』

（六冊）、『悉曇字記首書』（二冊）、『心經法藏疏首書』（序分科注入）（二冊）、『御製心經頭書』（一冊）、浄土宗が『往生十因首書』（四冊）、真宗が『和讃』（六冊）。日蓮宗、俱舍宗、華嚴宗、法相宗の四宗派における刊行はない。一方で禪宗においては『首楞嚴頭書』（一〇冊）、『碧巖集首書』（一〇冊）、『正宗贊頭書』（六冊）、『大恵書頭書』（四冊）、『臨濟録頭書』（二冊）、『無門閑頭書』（二冊）、『仏祖三經頭書』（三冊）、『心經首書抄』（三冊）、『江湖集頭書』（四冊）、『六祖壇經頭書』（二冊）、『原人論發微録頭書』（三冊）『曹山録頭書』（二冊）、『永覚内外録頭書』（二冊）、『元亨釈書頭書』（冊数不明）、『愚迷発心集頭書』（一冊）、と明らかにその数が抜きん出て多い。

更に現存する頭書本について刊年の順に次に示す。

慶安三（一六五〇）『新刻碧巖鈔』堤六左衛門

万治二（一六五九）『書頭江湖集夾山鈔』秋田屋平左衛門

『六祖壇經』林伝左衛門⁽²⁰⁾

万治三『鎮州臨濟慧照禪師語録』文台屋次郎兵衛・敦賀屋三右衛門

『書正宗贊』林伝左衛門・輕五郎兵衛

万治四『書科発微録』村田庄五郎（現存は後印か）

寛文一（一六六一）『和讃首書』西村九郎右衛門

寛文三『増補書仏祖三経』林伝左衛門

『書般若心経頌鈔』堀井伝右衛門

寛文四『六物図』板元不明

寛文六『冠注校十住心広名目』板元不明

『書無門関』村上勘兵衛

『書頭曹山元証大師語録』戸嶋惣兵衛

寛文七『書般若心経』八尾清兵衛

寛文八『評註書七十五法名目』田中庄兵衛（現存は後印か）

『書頭西谷名目』錢屋半左衛門

寛文九『撰文那大慧智覚禪師書』林伝左衛門

『往生拾因』丁子屋長兵衛

『新刻
首書碧巖鈔』、野田庄右衛門

寛文二〇

『大方広円覚修多羅了義經略疏註』、村上勘兵衛

寛文二一

『心經法藏疏』、板元不明

刊年不明

『孟蘭盆經疏新記』

『善惡因果經』

『悉曇字記』

『愚迷発心集』

右一覽からは知空の『和讃首書』の先進性が明らかかと思う。つまり、この時点では禪宗文献以外の頭書本の板行は見いだせないのである。更に言うならば、漢製仏典以外に頭書した物としても、『和讃首書』は最初期の例と分かる。こうした先進性は知空の仏教活動の特色の一と言えるが、また寛文元年当時、知空が禪的興味に対して依然としてそれに意識を向け続けていたことも示しているのである。

三、講義『浄土或問』の展開

『浄土或問鉤隠』の展開について更に見ていこう。

天和三（一六八三）年、『浄土或問』の頭書本が板行された。

大正大学附属図書館所蔵本によれば、本書の外題は「標註書浄土或問」。内題に「新刻浄土或問」、板心題には、「或問新註」とある。刊記として下巻末に以下のとおり記す。

天和^發三稔正月穀旦

日野屋半兵衛

板行

金屋半右衛門⁽²⁾

『^{標註書}浄土或問』は明らかに『浄土或問鈎隱』を底本として頭註を付していた。

例えば、『^{標註書}浄土或問』本文一丁表に、

參禪等者

『優曇宝鑑』ノ旧在ノ跋ニ曰ク、「參禪ハ予ガ所不^レ知^ラ念仏モ亦非^ズ予ガ所^ニ知^ル。」^上。延慶ノ一ノ元禪師ノ

曰ク、「參禪ハ亦是^レ唯^一心。念仏モ亦是^レ唯^一心ナリ。參禪ハ為^レ了^ニセンガ生^一死^ヲ念仏モ為^レ了^ニセンガ生^一死^ヲ。參禪念仏

ハ其ノ理、是^レ同^ジ。中峯ノ本禪師ノ曰ク、『禪ハ是^レ浄土ノ之禪、浄土ハ是^レ所以ナリ不^レ去^ラ。』^云。

とあるが、この箇所、『浄土或問鈎隱』には、

△序ノ中ニ參禪不^レ去^一 一 号

延慶ノ一元禪師ノ曰、「參禪モ亦是^レ唯^一心。念仏モ亦是^レ唯^一心。參禪ハ為^レ了^ニセンガ生^一死^ヲ念仏モ為^レ了^ニセンガ生^一死^ヲ。參禪念

仏其ノ理、是^レ同^ジ。中峯ノ本禪師ノ云ク、『禪ハ是^レ浄土ノ之禪、浄土ハ是^レ禪之浄土ト。是^レ所以ナリ不^レ去^一也。

とする。「延慶」以下、両書がほぼほぼ合致する（最後、『^{標註書}浄土或問』は「禪之浄土」が落ちているが）。

また、同じ本文一丁表、

禪主見性

『宝鑑』宗信ノ跋ニ曰ク、「參禪ハ主^ニ乎見^一性^ヲ閔（門十免）一教ハ貴^フ乎照^一心^ヲ。」^云。『宗鏡録』ニ曰ク、

「見性トハ者当^ニ見^一之^一時^一ナル、即是^レ自^一性ナリ。以^ニ性偏^一ニ一切^一処^一ニ、故^ニ不^レ可以^レ性更^ニ見^一於^ニ性^一分^一明^一顯^一露^一

糸毫^モ不^レ隱^レ。」^上。今日ク、「性ハ謂^ク仏性、塵ハ六^一塵。為^レテハ塵ト失^レ性^ヲ因^レテハ性ニ生^ズ塵^ヲ。膠^ヲ塵ニ曰^レ迷、照^レ

性^ラ曰^ト悟^ト。今ノ行人念^ル仏境^ヲ則^シ無^シ膠^一塵^ノ之心^ヲ參^ル本性^ヲ則^シ見^ル妙粹^ノ之性^ヲ。或^ハ二^一互^ニ通^ス。」

とあるところ、特に太字で示した「今日」以下に注意してほしい。『浄土或問鉤隱』には、

△見性離塵 一 号

性^ハ謂^フ仏性、塵^ハ是^レ六塵。為^レ迷^ニ塵^ノ失^レ性^ヲ因^レ性^ニ生^ズ塵^ヲ。膠^ニ塵^ニ曰^ク迷^ト、照^ニ性^ヲ曰^ク悟^ト。今ノ之行人念^ズル^{キハ}

仏境^ヲ則^シ無^シ膠^一塵^ノ之心^ヲ參^ル本性^ヲ則^シ見^ル妙^ニ粹^ノ之性^ヲ、或^ハ二^一互^ニ通^ス矣。

とあり、「今日」以下が訓点に異同があることを除けば完全に合致することが明らかである。『標註書 浄土或問』が『浄土或問鉤隱』を底本の一に用いたことは間違いないだろう。

更に『標註書 浄土或問』は元禄三年、『増補板』と題して再版される。元禄五年刊書籍目録はこれについて次のように記す。

三、浄土或問首書 並補考 西山端全⁽²²⁾

『標註書 浄土或問』は上下二巻二冊本であった。『増補板 浄土或問』は『標註書 浄土或問』より一冊多い。この一冊が「補考」である。そして、書籍目録にはその作者を「西山端全」とする。

実際に『増補板 浄土或問』を見てみると、例えば東洋大学附属図書館哲学堂文庫所蔵本（請求記号 こ／二／左／二八・二九）では頭書本『浄土或問』と『補考』（内題には「浄土或問事義補考」）は別本として管理されていることが分かる。頭書本自体は天和三年板と同板とみられることから、「増補」は「補考」を付したことを指すのだろう。

『浄土或問事義補考』には跋文が付されている。次に引用する。

一旦剗剗氏来而請補考予曰驚頭流布于世既顯然夫何請益矣不得于固辞因此微考塞彼之需耳若有所闕漏則頼俟傳雅之補苴云

元禄三歳次庚午春如意日

洛西光明学訓下（諸氏）⁽²³⁾ 欽纂

書籍目録には「西山諦全」とあったが、跋文に付された印記に明らかなようにその実名は「諦全」である。

書籍目録に「西山」とあり、また署名に「洛西光明」とあるところから、諦全が浄土宗西山派・光明寺門下の学僧とわかる。また、『浄土論註私記』の跋文に、

元禄六年龍輯癸酉冬臘月日弟子諦全（24）寓于京兆誓弘蘭若謹書

と記して、その名を見いだせる。『浄土論註私記』は『国書総目録』また国文学研究資料館日本古典籍総合目録データベースに「円空」の作、成立を鎌倉初期とするが、これは誤りで、『新纂浄土宗辞典』にあるとおり、本書は元禄六（一六九三）年に成立した曇鸞『往生論註』注釈である。注釈を付けた円空（生年未詳、元禄九）⁽²⁵⁾は栗生光明寺三十三世である。つまり、諦全は光明寺三十三世の弟子としてその著作に跋文を送る程度には名の知れた学僧だった、と見なしうる。また、本跋文に付された「誓弘」は恐らくは京都市下京区に現存する誓弘寺と考えられる。『大日本寺院総覧』には当寺を寛永元年円空の開基とするが、これは恐らく光明寺三十三世・円空と同一人物であろう。

『新増補浄土或問』は知空の『浄土或問鉤隱』を底本とした、真宗系統の注釈を基底とする『標註浄土或問』に浄土宗西山派の注釈を（補考）として付記した頭書本だった。これは近世における仏典注釈の流れを考える上で重要である。なぜなら当時の仏典注釈は各宗派に独自性が保たれていたと考えられるからである。

一例として『孟蘭盆経疏新記』注釈を見てみよう。『孟蘭盆経疏新記』注釈は慶安元年『孟蘭盆経疏新記鈔』が武村市兵衛から板行され、寛永七年には科註本が中野小左衛門から出た。その後、天和二年に頭書（四卷本）が板行されるが、これは前述の寛文十年刊書籍目録に登載されているから、出版年を遡りうる。一方、五卷本の頭書本『孟蘭

『盆經疏新記』もまた貞享二年刊『本朝彫刻広益書籍目録大全 作者付・大意』に初めて現れた。⁽²⁶⁾五巻本について、大正大学附属図書館所蔵の頭書本『孟蘭盆經疏新記』には裏見返しに興味深い書き入れがある。

此一通、延宝第九辛酉歳林鐘下旬、於江城御坊智空尊師講談之砌、令所持者也。真龍二世暁清承納。⁽²⁷⁾

本書は延宝九年、築地本願寺にて知空——たまさか知空の名は（智空）と記されることがあった——がその講義に用いた物である、というのだ。これはつまり、五巻本頭書本が真宗本派の講義上での利用に適していることを示している。

この時期、複数宗派から『孟蘭盆經疏新記』注釈の板行があった。まず、延宝六年に浅井了意が『孟蘭盆經疏新記直講』を、そして同年、六波羅蜜寺の住持であった真言宗の教山が『孟蘭盆經疏新記愚聞鈔』八巻を著している。更に延宝九年には浄土宗の単阿が『孟蘭盆經疏新記標指鈔』五巻を野田庄右衛門から板行した。ここで重要なのは近接して板行された『孟蘭盆經疏新記標指鈔』・『孟蘭盆經疏新記愚聞鈔』・『孟蘭盆經疏新記直講』三書の注釈内容が重複しないという事実であろう。⁽²⁸⁾おそらくこれは各宗派内での『孟蘭盆經疏新記』注釈がそれぞれ独立して発展してきた背景を示唆している。

このように、十七世紀においては少なくとも仏典注釈とその出版物には宗派の独自性が見いだされたはずである。そして、読み手もある程度これを了承している。知空は頭書本『孟蘭盆經疏新記』を講義に用いていたが、他宗派の影響が色濃いテキストであればこれを利用するわけにはいかず、読者に比定しうる学習者にとってその注釈がいずれの宗派の系統を引き継いでいるかが大きな視点であったと思われる。しかし、『^{新増補}浄土或問』はこの基底を打ち崩してしまった。

本書は『^{新増補}浄土或問』の時点で真宗的性格の強い注釈だった。しかし、『^{新増補}浄土或問』に『浄土或問事義補考』を

附してそこに諦全の跋を入れ、更に書籍目録にもこれが恰も諦全本人の注釈であるかのように明記したことにより、いくら諦全がその跋に「鰲頭流布于世既（頭書本が既に世間に流布している）」と述べてこれが自著でないことを明言していたとしても、『^{増補}浄土或問』の読者は頭書本それ自体が浄土宗系注釈であると疑わないだろう。

『浄土或問』頭書本に至って仏典注釈の交雑化が行われたことは特筆に値する。出版文化の開花により不特定多数に仏典注釈が開放された一つの結果と見なすことが可能だからである。仏典が寺院だけの所蔵物でなくなったのと同様に、注釈もまた、学僧らだけのそれではなくなった。開放と交雑化を経て近世仏教は新たな局面を迎えることになったのであり、その渦中に知空の『浄土或問鈎隱』があった。明暦三年の講義から三十三年後のことであつた。

四、頭書本の展開と出版規制の強化

寛文頃に活性化した頭書本仏書の板行は延宝期に入っても続いた。雲棲株宏の著述に限っても、例えば、単純な注釈書は寛文五年に板行された浄土宗西山派の教道による『阿弥陀経疏鈔管解』（水田仁左衛門）を嚆矢とする。また知空も注釈した『仏遺教経論疏節要』も、寛文八年冬、『遺教経私鈔』（二巻、丁子屋長兵衛）として板行されたが、頭書については寛文九年、黄檗宗の梅嶺道雪が『黄檗沙弥戒律儀要略』（田原仁左衛門）を上梓したのははじめだろう。続いて寛文十年、頭書『戒殺放生文』を「洛陽文館虚白」なる人物が板行する。また翌年にも頭書『戒殺放生文』が今度は河村利兵衛から板行され、間が空いて延宝六年、『^{補註}仏遺教経論疏節要』が村上勘兵衛から板行された。これに続くのが真宗仏光寺派の玄貞による『^{頭書}阿弥陀経疏鈔』であり、『浄土或問鈎隱』を用いた『^{標註}浄土或問』であつた。株宏著述だけ見ても、一般的な注釈書から頭書本へとその流行が変遷していったことが明らかかと思う。

頭書本のいっそうの展開を出版状況から探るために今度は貞享二年刊書籍目録を紐解いてみたい。

天台宗では寛文十年刊書籍目録から、『維摩經首書』（一〇冊）、『孟蘭盆經疏新記頭書』（五冊）、『西谷名目頭書』（四冊）、『観心略要集首書』（五冊）、『法界次第首書』（冊数不明）、『弘惑袖中策首書』（冊数不明）、『孟蘭盆供儀頭書』（五冊）の七部が新たに加わった。また、寛文十年刊書籍目録に『因果経頭書』とだけ記された頭書本「仏説善悪因果経」には「西本願寺下性海」と注釈者名が付記された。『孟蘭盆供儀頭書』についても注釈者として「阿春」の名が見える。次に律宗について、これも『沙弥戒律儀首書』（一冊）、『梵網經古迹首書』（四冊）、『六物阿春首書』（二冊）、『八斎戒作法頭書』（一冊）の四部が増えた。

法相宗では『百法問答首書』（九冊）、『太子伝首書』（冊数不明）、『明眼論首書』（二冊）、『太子五憲法首書』（四冊）、また、寛文十年刊書籍目録では禅宗に挙げられていた『愚迷発心集首書』（一冊）が法相宗に移動している。²⁹

真言宗は寛文十年刊書籍目録の時点で禅宗に次いで頭書本の板行が多かった。貞享二年刊書籍目録では『起信科首書』（四冊）、『頭書錫杖抄』（一冊）、『起信論起信筆削記』（二冊）、そして『頭書秘鍵科註』（二冊）が注釈者として「沙門真賢」と付記して登載され、また法相宗の項と重複する物として『頭書聖徳太子伝』（四冊）、『五憲法頭書』（四冊）を挙げる。また、『悉曇字記首書』（二冊）は寛文十年刊書籍目録にも登載されていたが、ここでは注釈者に「覚彦坊浄厳」を付加する。

寛文十年刊書籍目録では『往生拾因』に限定されていた浄土宗でも頭書本は増加した。『三部経略解首書図注』（四冊）、『望西楼首書』（二冊）、『大原談義首書』（三冊）、『浄土図名目首書』（二冊）、『群疑論首書』（冊数不明）、『浄土略論首書』（三冊）、『往生要集首書』（冊数不明）、注釈者を付記する物としては、『首書論註』（冊数不明）と『木母集首書』（一冊）に「阿春」、そして『浄土名目首書』（二冊）に「東閑」である。

寛文十年刊書籍目録では殆ど頭書本の板行がなかった諸宗においても頭書本の板行が顕著に増加したのであるが、頭書本の先駆者とも言うべき禅宗は加えてその数が膨大であった。新しい物としては『首書科入遺教経』（二冊）、『百丈清規首書』（冊数不明）、『六門集首書』（三冊）、『六祖法宝壇經首書』（二冊）、『拈古抄首書』（二冊）、『護法論首書』（冊数不明）、『蒙山对客首書』（三冊）、『大智度論首書』（冊数不明）、『首書金剛經略疏』（三冊）、『楞伽經三訴首書』（八冊）、『永覚広晩録首書』（二冊）、『永覚寢言首書』（二冊）、『永覚内外録首書』（一六冊）、『首書儒釈筆陳』（四冊）、更に注釈者を付記する物として、『虚堂録首書』（冊数不明）に「祖■考」、『中峯広録首書』（二〇冊）に「阿房南山考」、『浄慈要語首書』（冊数不明）に「讚古養存考」、『三籟集首書』（三冊）に「梅嶺考」、『洞上古轍首書』（四冊）に「西栢」、『首書拈古』（一冊）に「江武智選」を挙げられるが、特に『臨濟録改正増補首書』（二冊）、『日用清規首書』（二冊）、『禅家龜鑑首書』（二冊）、『戒殺放生文首書』（二冊）、『四部録首書』（一冊）、『証道歌注首書』（三冊）、『伝心法要首書』（二冊）、『十牛図首書』（一冊）、『壇經改正法宝首書』（三冊）『人天眼目頭書』（六冊）、『永平録首書』（三冊）、『学道用心集首書』（一冊）、『禅林拔類聚首書』（八冊）に「虚白考」と付記されて「虚白」なる人物の注釈量が膨大であることには注目すべきである。

寛文十年刊書籍目録に登録された書目についても、『仏祖三経注頭書』（三冊）に月海、『碧巖集首書』（二〇冊）に合山、『大慧書』（四冊）に「虚白処考」、『江湖集注首書』に「月海」、『無門関首書』（二冊）に「白雲ノ抄ヲ首ニ記ス」とし、『永覚晩録首書』（二冊）は、頭書本を「二板」として「一ハ玄光考」とその名を挙げる。

こうして見ていくと新たな傾向として、注釈者の付記を指摘できるのではないか。付記される注釈者の大半は当時名の知れた僧侶であった。『悉曇字記首書』に挙げられる「覚彦坊浄厳」、そして『永覚晩録首書』に挙げられる「玄光」、いずれも寛文十年刊書籍目録には明記されなかった名であるが、両者ともに当代を代表する仏教者であった事

実は、時代は下るが都の錦は元禄十六刊『御前於伽』卷一ノ三に、

夫仏法の教をたつる中に、道にちかきハ禅宗出家らしきハ律の僧なり、当世日本におゐて、四天王の僧あり、天台の靈空、真言の覚彦、東家の玄光、黄檗の高泉なり⁽³⁰⁾

と四天王の内に玄光と覚彦を挙げて言うことから明らかかと思う。

更に頭書本に特化した注釈者として、例えば、『六物図』『浄土論註』『木母集』に注釈した「阿春」は浄土宗、増上寺の学僧であり、また前述した「虚白」は書籍目録に登録されているだけで十四部の頭書本を手がける、当時最大の頭書本仏書作家であつた。

さて、この虚白の頭書について、『禅家亀鑑』について少しく見ていきたい。

『禅家亀鑑』は寛永十一（一六三五）年に和刻本が上梓された。更に、延宝五年、そして延宝六年の刊記を有する頭書本二部が現存する。刊記に従うならばまず延宝五年板が出て、次いで翌年、六年板が出たと見るべきであろう。問題は両書ともにテキスト本文の丁付、行数など完全に合致することである。延宝六年板が延宝五年板をそのまま覆刻したかと思う体裁である。更に、注釈についても、例えば、延宝五年板に、書名の「亀鑑」を立項して次のように記す。

○亀鑑 『祖庭事苑』云、「亀^ハ所^ニ以^テ決疑^ヲ鑑^ハ所以^ニ弁^ル物^ヲ。」○瀉山ノ警策ニ云ク、「亀鑑ノ註ニ、「亀^メ知^ニ未来一禍福^ヲ。鑑^ハ驗^ニ現^ニ在^ノ妍^ニ媸^ヲ。」。私^ハ云、「警策」ニ鑑^ヲ作^ル鏡^ニ義同⁽³³⁾。

一方、延宝六年板には、

○亀鑑 『祖庭事苑』云、「亀^ハ所^ニ以^テ決^ル疑^ヲ鑑^ハ所以^ニ以^テ弁^ル物^ヲ。」○瀉山警策ニ云、「亀鑑ノ註ニ、「亀^ノ知^ニ未来禍福^ヲ。鑑^ハ驗^ニ現^ニ在^ノ妍^ニ媸^ヲ。一。亀^ハ鑑^ハ知^ニ善^ニ惡^ヲ。」⁽³⁴⁾。

とする。延宝六年板には延宝五年板末尾に記された「私」云、『警策』^二鑑^ラ作^ル鏡^ニ義同^シ。』を省略するのみである。

大谷大学図書館古典籍データベースには延宝五年板について、末尾に注釈者として越前・妙心寺派の禅僧・祖実を、板元として吉野屋惣兵衛を挙げる。⁽³⁵⁾一方で、延宝三年刊書籍目録には、「三、禅家亀鑑首書」を挙げて「虚白考」と付記する。

そもそも、延宝五年板『禅家亀鑑』は単純に考えて延宝三年刊書籍目録には登載し得ない。とすればこの虚白による『禅家亀鑑』は延宝五年板ではありえない。次いで元禄五年刊書籍目録を開くと、当該箇所、

一、禅家亀鑑 曹溪退隠

二、同首書 虚白

二、同改正頭書 祖実

とある。つまり、まず寛永十二年に和刻本『禅家亀鑑』が板行された。次いで、恐らくは虚白による頭書本『禅家亀鑑』が板行された。更に、虚白註を（改正）する形で祖実による頭書本が延宝五年に出たのであり、延宝六年板は再版本である。

延宝五年板の「私云」以下は元々あった虚白註に祖実が付記しての「私云」だったと見るべきである。虚白註の板木を所持していた板元は改正板が出て驚いたに違いない。延宝六年、今度は刊記を付して再版した。⁽³⁶⁾また、後印本も成ったようであるから、祖実註の板行は延宝五年で止んだのであろう。

右の一例は明らかに重板類板に抵触する案件と考えられるが、実はこの頃から頭書本仏書においては同様の事例が複数確認できるようになる。『上組済帳標目』は元禄七年からの版元間における裁判記録を列記するが、頭書本仏書に関する裁判は最初期の元禄七年五月に出る。

一、恩重經首書 中野小左衛門板行被候致同網極抄二指構被候由候（元禄七年五月）⁽³⁷⁾

「恩重經首書」は真言宗亮汰による『仏説父母恩重經』の注釈書、『父母恩重經鈔』の頭書本である。延宝三年に初板が成り、また元禄十年に再版された。一方の「網極抄」は『父母恩重經罔極鈔』、貞享元年の成立、同二年に西村孫右衛門から板行された。裁判の結果は明らかではないが、『罔極鈔』は私に調べた限り貞享三年のあとの刊記を付すものではないから、これ以後出版は途絶えたのだろう。また、同年九月には、

一、西方要決首書 上村次郎右衛門板行被致戸嶋惣兵衛則相板二成相済申候

として記録が載る。「西方要決首書」は上村次郎右衛門の板行に戸嶋惣兵衛が差し構えたか、これは相板として済ませたとする。目録を紐解くと、戸嶋惣兵衛による『科西方要決略註』（二冊）が延宝九年に板行されている。更に元禄七年の跋文を付す頭書本（無刊記、書籍目録に「上村」）が見いだせたから、これが差し構えたのだろう。⁽³⁸⁾

こうした訴えの頻出は頭書本の形式が大きく関わっていたと考えられる。前の『禪家亀鑑』についても、その版面は著しく似通っていた。重板類板の規制強化は老舗書林の既得権益保護の観点も相まって元禄期以降強くその保護が訴えられてきたが、重板はまだしも、類板はその範囲が曖昧に過ぎ、訴訟の有無に判断が左右される嫌いがあった。頭書本は第一に、注記する本文が既に出版されているテキストの版面を殆ど踏襲している点において、高い類似性を持つ。仮令、注釈者が異なり、頭註内容に異同があろうとも、本文は同じであり、また、頭書はその形式があまりに独創的に過ぎ、その形式を変更することが困難であった。これもまた、類似性につながってしまう。

市古夏生は出版規制強化を背景とした古典注釈出版の行き詰まりを指摘しているが、頭書本仏書の場合、事態は更に緊迫していたのではないか。あるテキストがあつて、これに複数の頭註を付すことが難しくなった事実を右の裁判事例は示しているのであり、『禪家亀鑑』の例はその実情を歴々と見せつけているのである。

五、元禄以降の知空とその出版について

他宗において積極的な頭書形式の活用が見いだせた貞享二年刊書籍目録であるが、真宗には同様の趨勢が見いだせなかった。貞享二年刊書籍目録には寛文十年刊書籍目録に既に登載されていた『三帖和讃首書』（六冊）に加えて『正信偈要解首書』（五冊）と『首書照蒙記』（五冊）が追加されているが、これらはいずれも知空による頭書本であった。また、天台宗の項にまで範囲を広げるならば『因果経頭書』に「西本願寺下性海」とあるがこの「性海」とは近江高宮円照寺の住持であった性海（正保一〜享保一二）であろう、彼は西吟の弟子であり、そして知空の実弟であった。右は真宗における頭書本仏書の板行が知空とその近親者に限定されていたのが如実に示された結果と言える。これは当時の西本願寺で知空が置かれた状況に起因しよう。

三浦真証は『本願寺通紀』などを踏まえ、寛文末頃から「順当に御堂衆としての地位を確立したが、学林での講義を代講とされ、さらに代講も外されるという、いわば知空排除の憂き目に会っている」⁽⁴¹⁾ことを指摘する。

閑職に甘んじたといっても過言ではない状況の改善は元禄期に入り漸く訪れる。元禄八年、念願叶って西本願寺学林——学寮の使用は結句認められなかった——が再興され、知空は能化として『楞嚴経』の講義を行ったのである。

知空の出版もまた、延宝七年『安楽集鑰聞』を最後に途絶えていたが、元禄十三年、凡そ二十年ぶりに『註維摩詰経日講左券』が出版される。本書は元禄五年に江戸浜松の別院で行われた『註維摩詰経』の講義録であった。「浪速散人不可得照空」なる人物による元禄十二年の跋文にはその出版経緯が記されている。

吾師、往年在于江府講「維摩詰経」之次、採摘諸家註疏曰鈔録之以為講時之左券者積滿十軸、貧道、嘗託侍者、

而繕写之■藏積底而秘也。尚矣属日、有書肆、語吾余曰、海西之学士某、賜斯謄本乃許命工寿梓。冀、校讎之補正転写訛闕矣。其言至切無所於辞焉。余、亦随喜此書流行于世。窃対校旧本略訂烏焉以応彼之索而已。⁽⁴²⁾

ここに登場する「書肆」とは本書の板元・毛利田莊太郎であろう。毛利田莊太郎。また森田ともいう。貞享元年頃に出版活動を開始し、西鶴と組んで『梔久一世の物語』（貞享二刊）、『好色五人女』（貞享三刊）そして『日本永代蔵』（貞享五刊）を板行したことで知られる。⁽⁴³⁾一方で、貞享三年に浄厳が著した『光明真言観誦要門』を板行、その縁か、同五年、浄厳の甥・蓮体の『真言開庫集』、更に元禄六年にも『礦石集』を板行している。都の錦『元禄大平記』（元禄一五刊、青山為兵衛）に「儒学は五井加助門弟毛利田莊太郎」とその名を挙げて、実際に元禄十年、林九兵衛の紹介で古義堂に入門していることから儒者の印象が先行するが、半面、仏書の出版活動にも積極的な関与があった。仏書に限れば、元禄二年、厚見道純による『三教正宗』を、また元禄六年、浄土宗僧で鼓吹物作家としても知られる松譽巖的の『略論安楽浄土義詳解』を板行する。元禄十年には頭書本『俱舍論頌疏』を京都の三木太郎右衛門と相板で上梓、『註維摩経日講左券』は管見の限り、これに次ぐ毛利田による仏書出版となる。

元禄期における毛利田莊太郎の出版について、羽生紀子は次のように指摘する。

元禄期の当主は、門弟として学者と直接繋がりをもつと同時に、京都出版界と密接に関わった書肆サークルに属し、学者達の作者活動を支えていた。貝原益軒との交流にみられたように、毛利田は単なる出版書肆としてではなく、それらの作者たちの生活に深く関わり、作者活動の地盤を提供し続けていたのである。毛利田の出版活動の特色は、地域性にとらわれない幅広い書物の刊行にあったが、それはこの初期の当主時代に形成されたものといえる。⁽⁴⁵⁾

これを踏まえるならば、毛利田による知空の講義録出版はまず京都からの情報——西本願寺学林の再興と知空の能

化復権はある程度センセーショナルに耳敏い京都の町人たちによつて語られただろう——があり、更に大坂における周辺の学者仲間からの「不可得照空」なる人物が未刊の知空講義録を所蔵しているとのそれがあつたことを契機としよう。更に言うならば、毛利田庄太郎の仏書刊行にはある程度の売り上げが見込まれている。浄厳については先述したとおりであるが、松誉巖的については既に中村孫兵衛から『善導和尚臨終正念要決鼓吹』（貞享四刊）がある。本書は好評を博したと思しく、まもなくして板元を小嶋弥三右衛門から川勝五郎右衛門に替えて再版している。頭書本の板行については前述のとおりである。売り上げの見込めない学問書の出版が多かつたと言われる毛利田庄太郎であるが、仏書はその範疇ではない。天和頃から陸続と現れる新興書肆らは挙つて仏書板行に関わつたが、それは仏書が確実に売れる書物だつたからである。毛利田の知空講義録板行もまた売り上げを見込んでいた可能性は高い。そして講義録板行への期待値の高さは知空の学林内部の評価と干渉しない。ここに真宗宗学に限定されない外向的な知空の仏教活動とその著述の汎用性の高さを見出しうる。

宝永六年、再び毛利田庄太郎から『念仏三昧宝王論語鉗』が板行された。そして、正徳四年にも『蓮窓塵壺』ならびに『難波塵壺』がやはり毛利田から板行される。更に、同年、日野屋半兵衛から『三条答問』も出版された。

正徳六年には『十門弁惑論裨檢』が小佐治半右衛門から板行される。

陸続と行われた出版は知空が本屋にとつて出版するに値する人物だつたことを示す。また、知空もこれによく応えたと思しい。正徳五年、寺島良安の手により成つた『和漢三才図会』の跋文を知空が記す。真宗内に限定されない知空の行動、そして当代の評価をここにも見出すことが可能であろう。以後、享保三年に没するまで、知空は第一級の知識人として君臨したのである。

結語

以上、知空の講義を中心に、仏典注釈の流れを追った。仏典注釈を出版とともに見直すことには一定の効果が示せたと思う。そもそも近世仏教と出版の関係について、例えば藤井学が「出版技術の発展は經典や聖教の大量出版を可能とし、宗祖の真蹟は組織的に蒐集され、その研究は進んだ」と述べたように、従来の研究においては近世における仏書出版のわずか一側面しか評価してこなかった。しかし、十七世紀の到来と共に開花した我が国における出版文化、そして仏書出版は単純に〈經典や聖教〉の出版に限定されない。仏書の出版量は、特に近世前期においては全体の大部分を占めていたのであり、またその多くは〈經典や聖教〉の注釈書だった事実を看過すべきではない。知空についても、その思想的未熟性は認めて然るべきであろうが、一方でその先進性、積極性、そして柔軟性についてはこれを評価すべきだろう。

これは知空に限定されず、十七〜十八世紀前半における宗学とそれに関わった学僧ら全体に言うことではない。近世前期は萌芽的雰囲気もあつてその内容は挑戦的であり、先進性を備えていた。長らく批判にさらされてきた近世仏教はしかし少なくとも十七世紀においては多くの学僧が個々の活躍に対して真摯な取り組みを見せている。

本稿では仏典注釈に注目したが、知空の活動について、興味深い物の一に出版を介在させた宗論がある。寛文九年、知空は黄檗宗鉄眼の真宗肉食妻帯批判（楞嚴講談）を論破して『楞嚴講談破釈』を板行した。更に鉄眼が『楞嚴講談破釈評判』を、それへ知空が『楞嚴講談破釈評判再破』を板行する。出版を通じた宗派間の論争は当時複数例を見いだせるが、これもまた、中世期にはあり得なかった現象である。

出版と宗論について知空その他の事例を詳らかにすることは近世仏教、ひいては近世そのものの理解のために重要である。これを今後の課題としたい。

〔注〕

- （1） 藤井学「近世仏教の特色」『日本思想大系五七 近世仏教の思想』岩波書店、一九七三。
- （2） 石田慶和「近世真宗教学の成立と展開をめぐる一考察」『近世仏教 史料と研究』三号、近世仏教研究会、一九六一。
- （3） そもそも真宗における宗学ならびに学問所は他宗派に著しく後れていた。例えば、浄土宗は慶長二一（一五九七）年に知恩院・尊照により本末制度が整備され、また元和元（一六一五）年には増上寺の存応発案による浄土宗法度が幕府により発布されて関東十八檀林が公認されるに至っている。東本願寺は西本願寺に更に後れて寛文五（一六六五）年、第十四代法主・琢如による創設、宝暦五（一七五五）年に高倉通に移転して以後、所謂「高倉学寮」が整った。
- （4） 准玄の子孫が東本願寺に転派したために、准玄もまた没後能化の職位を剥奪された。知空が実際には三代目であるにもかかわらず二代目能化とされているのはこれによる。
- （5） 御堂衆について、例えば和田幸司は「本山の御堂の仏事一般を勤仕し差配する役職である。蓮如の頃までは6名の清僧からなっていたとするが、証如期以降、仏事だけでなく聖教の訓読教授の任にあたっていた。常住衆の中でもさらに特化された職能を有したと考えてよい」（和田幸司「近世初頭における本願寺定衆の役割と位置——九条西光寺を事例として——」、『教育実践学論集』一二号、兵庫教育大学大学院連合学校教育学研究科、

二〇一一」と説明する。

- (6) 宮崎円遵「知空の能化就職事情管見」(『龍谷学報』三二六号、龍谷大学、一九三九)。
- (7) 『承応閼牆記』(妻木直良編『真宗全書』五〇卷〔国書刊行会、一九七五〕所収)による。本書は寛文三年の成立である。著者は祐俊。山城西光寺十二世、また西本願寺の御堂衆として仕えた。
- (8) 菌田香融「黒江の異計(下)」(『近世仏教 史料と研究』三号、近世仏教研究会、一九六一)。
- (9) 伊藤顕慈「知空の行信論研究」(『真宗学』一四〇号、龍谷大学真宗学会、二〇一九)。
- (10) 三浦真証『『教行信証』伝授の一試論——寂如上人御講義を通して——』(『真宗学』一四〇号、龍谷大学真宗学会、二〇一九)。
- (11) 前田慧雲「本願寺派学事史」(『新編真宗全書 史伝編 一〇』、思文閣、一九七七)。
- (12) 『浄土或問鉤隠』の本文は大谷大学図書館所蔵本(請求記号 宗大二六八五)による。引用にあたり現行の字体に改めまた適宜句読点を補った。判読不能箇所については■とする。以下、本文の引用はいずれも同様とする。
- (13) 以下、寛文十年刊書籍目録は国立国会図書館所蔵本(請求記号 別・一四〇二/二二三)による。また、本稿におけるその他書籍目録については『江戸時代書林出版書籍目録集成』(井上書房、一九六二、六四)を参照した。
- (14) 龍谷大学図書館所蔵『遺教経補註私考』(請求記号 二四一・六/二四一W)。
- (15) 大正大学附属図書館所蔵『遺教経論疏節要補註私考』(請求記号 一一七六/二九/一)。
- (16) 国立国会図書館所蔵『仏遺教経論疏節要』(請求記号 八二二/一六〇)の本文は国立国会図書館デジタルコレクション(<https://dl.ndl.go.jp/info:ndl.jp/pid/2537711>)による。
- (17) 「謹奉訴状」(『破邪問答』上巻、妻木直良編『真宗全書』五〇卷〔国書刊行会、一九七五〕所収)。

- (18) 前掲注(10)。三浦真証『教行信証』伝授の一試論——寂如上人御講義を通して——。
- (19) 高山節也「和刻漢籍鼈頭本について——その特質と沿革——」(『日本漢文学研究』三号、二松學舎大学、二〇〇八)。
- (20) 国文学研究資料館マイクロフィルム(九一／オ八／一五〇―一二)。刊記に「万治二^己歲吉旦／三条通菱屋町ふ屋／林伝左衛門尉板行」。林伝左衛門は婦屋仁兵衛とともに林甚右衛門の板木を多く譲り受けて商売をしたと思われる。仁兵衛が浄土系の仏書板行に勤しんだ半面、伝左衛門は禅籍板行に注力した。万治二年の本書を嚆矢として、頭書本の最大の板元とも言える(そのきっかけに父祖・林甚右衛門による最初期の頭書本板行『老子膺齋口義』があったことは穿ち過ぎではあるまい)。後、独庵玄光の仏書板行にも深く関わり、その頭書本をも板行した(拙稿「近世前期における『孝養集』板本の伝播とその背景」(『人間文化創成科学論叢』一八号、お茶の水女子大学大学院人間文化創成科学研究科、二〇一六)参照)。
- (21) 以下、『^{標註書}浄土或問』の本文は大正大学附属図書館所蔵本(請求記号 一五三二／七四／一)による。
- (22) また、元禄九年刊書籍目録に「三^{金ひのや半}、浄土或問首書^{並補考}」西山蹄全 三奴[」]。
- (23) 『浄土或問事義補考』の本文は『近世漢籍叢刊 和刻影印 思想四編二』(中文出版者、一九八四)所収の元禄三年影印版による。
- (24) 『浄土論註私記』の本文は大正大学附属図書館明福寺文庫所蔵本(請求記号 一／二二八／七)による。
- (25) 『増訂日本仏家人名辞書』(鷲尾順敬編、辞典叢書一二、東出版、一九九六覆刻)による。ただし、同書「浄土宗西山派光明寺歴代」に延宝二年十月十七日就任、元禄九年八月七日入寂とするが、「円空」の項には「山城光明寺の僧なり、円空字は久団、俗姓生国未詳、信山無壁に師事して浄土宗西山派の学を修め、尾張曼陀羅寺に

住し、次に山城粟生光明寺に遷り、其教を弘む、寂然並に世寿歛く」と記して混乱がある。

(26) 後述のとおり、知空が延宝九年にこれを利用しているから、五巻本の刊年はこれに遡りうる。

(27) 五巻本『孟蘭盆経疏新記』の書き入れは大正大学附属図書館所蔵本（請求記号 一一七七／一九／五）による。

(28) 反対に、了意の『孟蘭盆経疏新記直講』と五巻本頭書『孟蘭盆経疏新記』との間には、ある程度の影響関係が見いだせた。

(29) 『愚迷発心集』の著者・貞慶（解脱房）は法相宗僧侶であるから法相宗に立項されるのは妥当である。しかし、本書の最初期の注釈書である『愚迷発心集思連鈔』の再治本である『愚迷発心集寄講』には妙心寺の万拙が序文を記していることから、著者・守元は臨済宗の僧侶であつた可能性が高い（拙稿「浅井了意仏書考―『無量寿経鼓吹』を中心に―」『近世文藝』一一〇号、日本近世文学会、二〇一九）参照）。当時『愚迷発心集』が禅宗と深い関係にあつたことを示唆しているか。

(30) 『御前於伽』の本文は『御前おとぎほうこ』（三三文房、一八九一）による。天台の靈空とは天台宗の僧侶で安楽律院の開祖・靈空（承応一〜元文四）、覚彦は真言律宗の中興といわれる浄厳覚彦（寛永一六〜元禄一五）。玄光が肥前出身の曹洞宗僧侶の独庵玄光（寛永七〜元禄一一）。高泉は黄檗宗の僧侶で明から渡来した高泉性澈（崇禎六〜元禄八）。浄厳と靈空を律、玄光と高泉を禅宗とする。四者中、三者が一七〇〇頃に没していることを踏まえても、『御前於伽』自体は元禄十六（一七〇三）の板行であるが、これは凡そ十七世紀末までの世間の評価と見なしうるだろう。

(31) 『新纂浄土宗大辞典』（浄土宗大辞典編纂委員会編、浄土宗出版、二〇一六）「阿春」参照。

(32) 虚白については目録などに毛利貞斎と同一視する向きもあるが、確定しない。（母利司朗「毛利貞斎著作考」『東

海近世』八号、東海近世文学会、一九九七）参照）。ただし、寛文十刊頭書『戒殺放生文』の刊記を見る限り本書は「洛陽文館虚白」個人の板行と考えられ、そこに宗教色を見いだせない。「虚白」が仏家ではなかった可能性は高いのではないか。

- (33) 延宝五年板『禅家龟鑑』の本文は岐阜市立図書館所蔵、国文学研究資料館マイクロフィルム『頭書禅家龟鑑』（請求記号 二五三／七三／八）による。翻刻にあたり国文学研究資料館新日本古典籍総合データベース (<https://kotenski.nijl.ac.jp/biblio/10009796/viewer/>) を参照した。

- (34) 延宝六年板『禅家龟鑑』の本文は国立国会図書館所蔵本（請求記号 一九六／六一）による。

- (35) 大谷大学図書館古典籍データベース (<http://bib.otani.ac.jp/cat/itemview.php?id=22/000785>) 参照。

- (36) ただし、これ以外にも『禅家龟鑑』の出版には混乱が見いだせる。元禄九年刊書籍目録には虚白註の板元を「吉野屋」そして祖実註を「村上勘左」とし、『元禄・正徳 板元別出版書総覧』には虚白註の板元を吉野屋徳兵衛、祖実註を村上勘左衛門（相板書肆を林久二郎）とするが、実際には虚白註（延宝六年再版）の板元は村上勘兵衛（平楽寺）であり、祖実註（延宝五年板）は吉野屋想兵衛である。

- (37) 宗政五十緒・朝倉治彦 編『京都書林仲間記録 五（京都書林行事上組済帳標目） 改版』（ゆまに書房、二〇〇一）。

- (38) ただし、戸嶋は天和元年頃には江戸を追放され、板木を譲渡しているという（市古夏生編『元禄・正徳板元別出版書総覧』（勉強出版、二〇一四）参照）。

- (39) 市古夏生「近世における重板・類板の諸問題」〔近世初期文学と出版文化の研究〕（近世文学研究叢書八、若草書房、一九九八）所収）。

- (40) 西村九郎右衛門板行の頭書本『仏説善悪因果経』か。国文学研究資料館所蔵本（請求記号 ヤ五／九五）は一卷一冊、巻末に、「五条橋通扇屋町／丁子屋／西村九郎右衛門開板」と刊記を付すのみで、注釈者名は付さないが、日本古典籍総合データベース (http://dbrec.nijl.ac.jp/KTG_W_4922) には著者として「性海（せいかい）」を挙げる。ただし、「性海」の読みは「ショークイ」が正しい。また、性海の著述としては、「著作無量寿経頭宗疏十七卷、正信偈要解刊定説五卷、小経開持記補科三卷、因果経首書一卷」（前掲註（25） 鷲尾順敬編『増訂日本仏家人名辞書』）。

- (41) 前掲注（10）三浦真証『教行信証』伝授の一試論——寂如上人御講義を通して——」。

- (42) 『註維摩詰経日講左券』の本文は大正大学附属図書館明福寺文庫所蔵本（請求記号 明福寺文庫 五／九／四）による。

- (43) 毛利田庄太郎の出版物については羽生紀子「岡田三郎右衛門・毛利田庄太郎出版書目年表」（『鳴尾説林』五号、狂友会、一九九七）他参照。

- (44) 『元禄大平記』の本文は『都の錦集』（中嶋隆校訂、叢書江戸文庫六、国書刊行会、一九八九）所収『元禄大平記』による。

- (45) 羽生紀子「本屋毛利田庄太郎の活動——西鶴周辺の書肆——」（『武庫川国文』五〇号、武庫川女子大学国文学会、一九九七）。

- (46) 前掲注（1）藤井学「近世仏教の特色」。

〔付記〕 本稿は国文学研究資料館共同研究（若手）「近世前期における和刻本仏書の基礎的研究」の研究成果の一部で

す。執筆にあたり、資料の閲覧と使用の許可を下さった諸機関に深謝申し上げます。

Annotation of Buddhist Scriptures in the Early Modern Period ; Lecture Record and Publication of Chiku

KIMURA Michiko

Chiku was a scholar priest belonging to Buddhism's Shin sect and this paper attempts to re-evaluate Japanese early modern Buddhism by elucidating his annotations of Buddhist commentaries and their development.

Of note is that the Zen character found in Chiku's writings is a reflection of his teacher, Saigin. Chiku tried to overcome ‘承応の闘牆’ by using Zen perspectives derived from the Shin sect.

Significantly, it has come to light that a record of Chiku's lectures was used by the annotation published in 1683. Moreover, the book reprinted in 1690 was added annotations by Taizen, a scholar of the Jodo sect. This is proof that at the end of the 17th century, the Buddhist annotations that had been communicated independently by each sect were, in fact, compendiums of various authorities.

From the beginning of the 18th century, the publication of Buddhist annotations declined rapidly against the backdrop of tightening publishing regulations. But Chiku's lectures were published by his disciples from bookstores in Osaka.

It can be concluded that Chiku's progressive stance also spread to other Buddhists in the early modern period, and that this can be viewed as a positive characteristic of Japanese early modern Buddhism.